

---

# ポエる、ポエれば、ポエらいでか

武倉悠樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポエる、ポエれば、ポエらいでか

### 【Nコード】

N05140

### 【作者名】

武倉悠樹

### 【あらすじ】

連載の一話として一作ずつ詩を載つけていきます。

友人に頼まれ、歌詞用に文字数を調整した物もあれば、適当に殴り書いたものまで、一貫したテーマも無しにつらつら詩を垂れ流します。

テーマを決めて、言葉を選んで短文を綴る、というのが他の作品へも何らかの刺激になればいいなあとか。ウンチャカフンチャカ。

気の向くままに不定期掲載になります。

じじいよろこべ。

## すれ違イズム

喜怒哀楽って言うけれど、どうかんがえても四つじゃねえよ。

もてない仲間に彼女ができた。嫌いな教授が交通事故に。

例を挙げればキリないけれど、とにもかくにもわびさびおかし。  
玉虫色の僕らの心。彩り豊かに泣き笑い。

虹は七色なんて言った奴。図工の成績悪いだろ。

青と藍だけでも細かく見たら。間にあるのは何億色か。

色に始まることじゃなくとも。とにもかくにも無限の広がり。 1  
と0の間の色は、どこまでいっても限りなし。

僕の好きと君の好き。同じ言葉で、同じ文字で。

必死な言葉と、冷めてた言葉。近くて遠くて、未来と終わり。

辞書には載らないこの違い。覚えるために涙をこぼす。白と黒で  
二人の心。どこまで行っても交じらずに。

言葉じゃ足りない、この気持ち。表すためにとにかく叫ぶ。違い  
がわかって違うままで、それでも誰かに届けばいいと。届いてくれ  
と。

## すれ違イズム（後書き）

作中でも書いていますが同じ言葉でも、各々が抱く印象、捉える意味というのは違う気がします。

「悲しい」と一言書いても、僕の伝えたい「悲しい」はだれにも伝わっていないのだろうなと思うと、なんか虚しくなります。

ならば、と、いつそ、言葉を投げ捨てて、筆を執ったり、弦をかき鳴らしてもいいのですが、それでも結局ふんわりとしたニュアンスを伝えるのが精一杯で結局齟齬なく意味を伝え合うという手段を僕は持ち合わせていないのだと思います。

まあ、それでも、あきらめてちゃつまらなと思うので、しらすらとなんか書きますが。

## 空っぽ童心

両耳イヤホン詰め込めば、そこは僕だけの世界で。雑踏にはそういう世界があふれてる。

人混みに浮かぶ顔は、それぞれがだれも見てなくて。交わした視線はどこかへと通り過ぎていく。

凸凹に歪んだ心。鍵穴と鍵のようにぴたりと合う心が合るものか。

どこかで聞こえていますか。あなたの周波数はいくつですか。渴いているのはわかっているのに、どうしていいかもわからずに。

ネットの窓を開いてみれば、君を迎える物事ばかりで。興味のあることだけを見聞きして。

SNSとかブログとか。聞いてほしいのは自分語りで。

独りよがりのオンリーワンに価値などないと気づいてみたけど、そこから向こうが見通せなくて。

どこかで見えていますか。あなたのフィルターは抜けられますか。認めてほしいとわかっているのに、誰かの為には動けなくて。

どこかで泣いていますか。あなたの心は求めていますか。

どこかで叫んでいますか。あなたの隣はあいていますか。

勇気を出して右手を出すから。どうかどうか。あなたの右手を出

して貰ってもいいですか。

「入れて」と一言唱えて仲間になれた童心は、大人の今はもうないけれど、大人になっても独りで居るのは辛いから。

## 空っぽ童心（後書き）

嫌いな人付き合いの合間とかに携帯を開くとほんの少し安堵感を覚えるのは僕だけでしょうか。

持ち歩けるパーソナルな感覚は、安堵感をくれはしましたが、その分、なんかATフィールドが少し強くなった気がします。

こんなこと書きつつも、人ごみでは常にイヤホンを突っ込んで自分の世界に浸ってますがね。

今、読み返してみると、なんか今時の若者のパーソナル感を履き違えた保守的な大人の勘違いな感じの詩ですね、これ。

でもまあ、自己という物が肥大してる気はしますね。良いのか悪いのかは知りませんが。

## 春風ノンシュガー

偉人の名言調べてみれば、出るわ出るわ色恋沙汰が。

希代の哲学者だって、高名な詩人だって、口を開けば惚れた腫れたのオンパレードで。

世界の真理に挑んだプラトンだって、恋を詩っては愁嘆場に泣いたのに。

生活指導でいつも目を付けられるそのブロンドが、地毛だとなんども怒ってたよね。

言葉を交わして、笑顔をもらって。君のエピソードが僕の中になまっていく。

君にまつわるエピソードの数々が、僕の中の君を色鮮やかに飾りたてていく。

総天然色で笑う僕の中の君は、だけど、笑うのは僕にじゃなくて。

好きって言う気持ちが大きくなって、だからもっともっと知りたくて。

始まる前に終わった想い、行き場ないまま泣いている。

初めて吹いた春の風が、勢いのままに僕を置き去りに。舞台上に立てずに潰える恋が、彼女の遠さを見せつける。

初めて吹いた春の風は、爽やかさを感じるまもなく。

恋愛マンガを開いてみれば、出るわ出るわ、甘い恋。

幼なじみだって、クラスのマドンナだって、最終的にはくっつくんだろっ。

やらない後悔よりやる後悔だって、脇役の奴は勝手に言う。

シナリオの中の友達役は、甘い言葉で惑わすけれど、舞台上に上がることさえ許してもらえず。

言葉を交わすことが楽しくて、その意味なんて深く考えなくて。

君のことを知れるうれしさの意味には気づけたけれど、君の中の想いには鈍感なままで。

みんなが誉める君のえくぼを、君は快く思っていないんだっけ。

そうボソッと漏らした君の言葉に、似合っているよと返したけれど、困ったような笑顔を見せられて。

気づいた頃には叶わぬ恋で、悔し涙すら流すことなく。

初めて吹いた春の風は、君のところまで届かなくて。

告げることなく散った恋。酔いも甘いも感じぬままに。

初めて吹いた春の風。忘れられない冷たい春風。

春風ノンシュガー（後書き）

タイトルから何から自分のセンスとはかけ離れたものですが、意外と絞れば出てくるものです。

……いや、出てきてるって言うのか？これ？

深くは考えないでおこう。

どこかのだれかの琴線に少しでも偶然うっかり間違いで触れればめっけもんだぜ、こんなもの。

## ストーリージャンキー

幼馴染のあの娘にお堅い委員長のあの娘。

よりどりみどりで色とりどり。

用意された結末はハッピーエンドで、わかっているから安心できる。

本を開いては、本を閉じて。本を閉じては、本を開いて。

顔を上げた時にだけ、目に飛び込んでくる。

文字と文字の合間を飛ぶ視線が不意に捉えるあなたの笑顔を、  
だけ  
ど長くは見られなくて。

ストーリージャンキー。ストーリージャンキー。

そこに自分は居ないとわかっている。ハッピーエンドにならない  
ストーリーから逃げたくて。

文字の海に逃げ込んで。ブクブク溺れている間だけ、安心できるは  
ずなのに、それでも不意に君が微笑む。

サッカー部のキャプテンに、期末の学年トップ。

彼女の周りにきらめく彼ら。

読むまでもなくわかるそのオチは。涙に暮れるだけだから。

お決まりのハーレムの主人公が自分じゃないのは百も承知。

教室の隅から視線を投げて、空を掴んで落ちる視線。

落ちた視線を広い止める文字の羅列を頭の中に刻み込む。

ストーリージャンキー。嗚呼ストーリージャンキー。

分かっているさ、ストーリージャンキー。ギャップが大きくなって  
抜け出せないなんて。

ヒロインの顔に君がダブる。ヒロインが想いを寄せる、あいつに僕  
はダブらないのに。

ストーリージャンキー。嗚呼ストーリージャンキー。嗚呼、僕は悲し  
きストーリージャンキー。

## ストーリージャンキー（後書き）

なんか2作続けて悲恋ものですが、まったくもって作為はありません。

ちなみに、僕はハーレム、キャツキャツキャ、的なものよりいわゆるギャルゲーって奴の世界に入り浸ったってた様な過去がある様な気がします。

## 明け慕の

まどろみを包んでくれている暗闇が徐々に徐々に剥がされていく。

暗闇の中で、ゆったりと泳いでいた深海魚も光を嫌って、奥へ奥へと潜ってしまう。

丑三つ時はとうに過ぎ、液晶の向こうではようございますが飛び交い始める。

息吹がポツリ、ポツリと、光と熱を浴びて芽吹く。変わりになにかを置き去りにして。

今は明け慕の。

夜でも、朝でもない。

狭間に広がる、水面も水底もない黒く白く灰色の海。

昏さも、耀さも、全部一緒にあつて。

未来も、過去も、全部そこにある。

青くさくなったり、シニカルに微笑んだり。

秒針は均等に夜を刻んでいくけど、流れる時間は歪んでる。

引き延ばされたと思ったたら気づけばすぐそこで。

できるのは過ぎた時間を照らす、明るさからの逆算だけで。

終わるのは知っていたけど、こんなに早く終わると思わなかったから、今となっては彼の自分の輪郭すら描けなくて。

もし待っているのが明るい輝きでも、この瞬間だけは、果ての知れない奥に手を伸ばしたくなる。もう少し話せないかと。

暗さとまどろみと孤独だけが描ける輪郭のない輪郭。

どこを探してもここでしか会えない。

表か裏かもわからない。2次元なのか、3次元なのか、4次元なのか。夢でも現でもない。

明け慕の君。

また、会いにこれたら。

## 明け慕の（後書き）

夢うつつとつか、まどろみとつか、なんかぼんやりしてる夜でも朝でもない時間ってあるよね。ってことで、そんな時間に浮かんできた言葉を繋ぎとめてみた。

異常にダウン入ってたり、アップ入ってたり。

色々あるけど、あの時の自分も多分きつと恐らく自分の一面です。

## ロストソング

名も知らぬ鳥で羽ばたく一羽の鸚鵡。

赤と黄色の冠羽をなびかせて、鮮やかな緑の森を飛ぶ。

大海に浮かぶ小島に、仲間はいないけれど、歌う詩は楽しげで。

猿も、鳥も、虫達も。誰も喋らぬこの島で、鸚鵡は言の葉を歌う。

彼らはバベルの子供。栄華を極めたバベルの子供。

The Babel's parrot sings the  
lost song

根ざす大地の緑と、貫く天の青さは変わらずに。

変わっているのはただ一つ。風に乗って泳ぐ詩を誰も聞いてはくれない事。

文字にも出来ず、意味もわからない、古に失われたバベルの詩。

語り継いだ鸚鵡たちもその意味はわからない。

彼らはバベルの末裔。天に裂かれた言葉の語り部。

The Babel's parrot sings the  
l

o s t s o n g

雲にも届く高みで優雅な詩を歌うバベルの民。

籠の中で歌う鸚鵡と楽しそうに歌うのさ。栄華の詩を。

そんな彼らを知らない末裔の鸚鵡は、今日も歌うよ、バベルの詩を。

誰にも届かないとも知らず。失われたバベルの詩を。

彼らは栄光の化石。歴史を歌うバベルの末裔。

T h e B a b e l ' s p a r r o t s i n g s t h e l  
o s t s o n g

## ロストソング（後書き）

ところで、鸚鵡の真似する人語って超世代的に伝染するもんですかね？とか、浅学なまま認めました。

本当は短編用のアイデアだったんです、コレ。

古のバベルの言葉を操る鸚鵡の繰言を通して現代の悩める子供が答えを見出すって話の。

「今も昔も人間の基本的な悩みは変わらないんだよ」ってな感じの寓話にしようとも思っただけ、古今東西悩みと言えばラブじゃろう、とか考えたところで、バベル語じゃ、子供意味わからんやん、となりました。

「失った言葉を喋る鸚鵡」という要素自体にはなんだか哀愁とロマンのような物を感じたので、詩として再生してみたり。

ネタリサイクル。

## ポジティブリティ

高熱が空気を突き破り、ピシヤリと一発雷鳴が轟いた。

7・7億ボルトの神鳴りが、旋毛の先から踵までを貫いた。

骨はスケスケ、髪はチリチリ。大口ガパリと黒煙噴けば、新しい地平が見えるだろう。

シナプスに始まり末端神経まで、電圧は十二分にある。

視線は仰角30度。

立ち込める雷雲の向こうに太陽見出す勢いで。

ブランニューミーだけ、過充電。

火が風を呼び、風は炎を生み出した。

プラチナすらも溶け出す1800度。爆熱紅蓮を纏えばそりゃ当然大炎上。

皮膚に始まり、肉、骨、心すらも、真っ黒焦げなんて通り越して、見えてきたぜ新次元。

血潮どころか魂までも、熱は売るほど満ちている。

視点は遙か未来。

燃える意気込み鬱屈さなんて焼き払って。

ブランニューミーだけ、オーバーヒート。

そんな奇跡は起きずとも、眠って起きればブランニューミー。

途切れた意識が目覚めるなんて、誰も保証していない。

それでも毎日起きちゃう俺の奇跡具合。

ブランニューミーすれば、見えて来るんだよ、色々と。

俯くな、後ろ向くな、目を開ける。

大丈夫だって言ってるだろう。

朝起きたって事は、大丈夫なんだと言ってるようなもんだ。

グッドモーニンブランニューミー。

ブランニューミーって言うておけば、多分きつとブランニューミー  
なんだよ。

## ポジティブリティ（後書き）

書いといてなんです、だぜ、って語尾ヤバイね。

1800 なんて炭化どころの話じゃない気もしますが、要はバーニングハートですよ。

意気込みって大事。

こんなやつ居たら暑苦しくて友達にはなりたくないですが、でもこんな奴居たらちょっとうらやましいかも。

## 航海者

つかまり立ちを覚えてから、果たしてどれ位の間、支えていてもらえるのだろうか。

飛ばされも、流されもしない、そんな安心から、けれどいつかは出て行かなければいけない。

飛び出したそこは、青くて、広くて、どこまででもいけそうだけど。

休む事無き航海者。

今だけは振り返って、その目に刻め。

また大地を踏めるのは、大海を泳ぎきつた時だけなのだから。

青い自由は潮と風と渦が待つ。必死に棹を差したとて、切れる舵は僅かだろう。

気づけば朝も夜も過ぎていき、照らす太陽と水面だけの景色で途方にくれる。

一月が一日で過ぎ、一年が一月で過ぎる海で、僕らは何処に向かうのだろうか。

止まる事無き航海者。

とにかくもがき続けて、空を見る。

誰しもが、沈む恐怖には勝てないのだから。

迷いも擦り切れた大海の果てに、彼岸を見るだろう。大地の温もり  
に涙を流し、最後の力を振り絞る。

その大地の名など知らずとも、今はただ安堵にすがって、船を降りる。

見知らぬ大地の土の香りに抱かれて、揺れぬ寢床で夢を見る。

渡りきった航海者。

望んだ大地で無かろうと、今は眠りの喜びを知れ。  
海を渡った誇りだけは、誰にも汚せぬのだから。

夢を見ている航海者。

幸せに満ちた夢の世界で喜びを知れ。

それだけが、航海者が得られる、祝福なのだから。  
安らかな眠りに、永久に、抱かれて。

## 航海者（後書き）

これを読んで、皆さんは何を想像するんですかね？

こつこのの喩えの加減というのがよくわかりません。どんだけ元のものから離せばいいのか、とか。

まあ、とにかく、あんま明るいお話じゃないですねえ。

## 虹の果て

竜の角を剣に差しして、鯨の皮革をまとう男。

大鷲の背に乗って、海を越えるその冒険家は、その行いによって祖国の誇りであった。

男は英雄の誉れを拝し、それを誇りに抱きながら、今日も前人未踏の地を求めていた。

雲より高く、鯨より深く。風より早く、炎より猛々しく。

男は満ち足りていた。自分の踏みしめる一步一步には意味と情熱がこもっていると信じていた。

ある時、そんな男を試練が襲う。

自由気ままに尖峰を制し、空の頂きを究めた時だった。

雲海を見渡す絶言の景色の中に、男は悲劇を見た。

祖なる王国から上る戦火の煙。

それは、英雄の膝を折るのに十分な光景だった。

王国は戦のただ中であつた。緑を豊かに湛え、心優しき人々に支えられたその国は、大国の影に押しつぶされそうになっていた。

男は憂えた。

男たちの恐怖を。女たちの悲しみを。子供たちの明日を。

英雄と讃えられながら、祖国を救えぬままでよいものか。

雷雲をくぐり、火山を跨ぎ、英雄は求めた。

祖国に笑顔を運ぶ術を。

祖国の明日を照らす光を。

そして、英雄は見つけだす。

断崖の遙か下。渡り鳥すら知らぬ未踏の島の奥の奥。千歳を生きた大樹の陰に。またしても英雄は膝を折る。その目には感涙が溢れていた。

それは魔法。それは奇跡。それは希望。

誰もが息を飲む奇岩にして巨岩。

七色の光に包まれたその岩は、世界を染める虹の源。

絶望すらもかき消す光と色の奔流。

それは、祖国を勇気づけるのに十分すぎる、英雄の功績だった。

英雄は祖国に奇跡を持ち帰った。

男たちを癒し、女たちを慰め、子供たちを笑わせるために。

しかし、奇跡の光はその明るさ故、人間の醜さを浮かび上がらせる。戦に疲弊していた国王が奇跡の前に放った一言は、英雄の心を引き裂いた。

「これだけの魔法の力があれば、あの大国をも打ち負かせる」

英雄は三度膝を折った。

涙を涸らし、声を涸らし、さげぶ。

魔法は、奇跡は、そんなことの為にあるのではないと。

やがて、時がたち、大国の首都で、虹の華が咲いた。

三つ海を越えた地ですら、確かに目に映った、その巨大な華を見たものは口をそろえてこう言う。

「言葉が出ない」と。それほどまでに虹は美しかった。

奇跡の巨岩は虹の華を以てして大国を灼いた。

四つの街と二つの河と十六の村。十八の砦と三つの要塞。二十六の街道と、そして一つの宮殿。そして数え切れない人間。

その全てを、奇跡は、灼いた。この世の物とは思えない、美しい幻想を以ってして灼いた。

その光を正面から受け止め、英雄は両の眼の光を失った。  
多くの人から英雄と讃えられた男。  
そしてそれより遙かに多くの人間から悪魔と罵られた男。

彼は盲いた眼で、命の潰えた大地を見つめながら、涙を流したまま、  
その地で果てた。

今際の瞬間まで灼け野原に立ち続けた男は、終ぞ、七色の涙を涸らすことはなかった。

## 虹の果て（後書き）

なんだか、書いててクロノトリガーを思い出しました。

読んだ皆様にはそういった方は居られましたでしょうか。

自分の中で「虹の源」とか「虹の出づる場所」ってものになんとか惹かれるものがあります。

どこかで、見聞きしたキーワードなんでしょうけど、はてさて、なんだったかなあ。

## ジャック・オー・ランタン

自らのイノチの意味に悩む男が居た。

夕暮れに独り問い掛け、さざなみに独り愚痴をぶつける。

男の悩みは、大人への階段の足元に広がる、独特の昏い熱病のそれとは、少し異なった。

それよりも深く、黒く、重い。

男の歩みから、男の思考から、男の呼吸すらからも、色を奪う。

その悩みは男にとって糧であり、使命でもあった。

男は鉄くろがねのカラダと数字デジタルのタマシイを持つヒト。

命とは何かを詳つまびらかにする為に生み出された、孤独なイノチ。

魂のエゴを探るために、内燃機関に火を入れられたオトコ。

人は、男をJACKななしと呼んだ。

JACKは常に悩みと共にあった。

そう造られたからだ。

人間と同じように食べ、人間と同じように眠る。そうやって造られたJACKの体はしかし、鉄くろがねで。

人間と同じように泣き、人間と同じように笑う。そうやって造られたJACKの魂はしかし、数字<sup>デジタル</sup>で。

JACKは幾度も問いかける。私のイノチは命なのだろうか。どうすればそれが明らかになるのだろうか。

その命題<sup>オイダー</sup>こそがJACKの製造<sup>うまれたいみ</sup>意義であり、存在<sup>いきるりゆう</sup>意義を彩る物だからだ。

幾星霜の夜を悩みぬいた。もはや、JACKを造った人間は死に、心を通わせた者も誰一人生きて居なかった。

そうして、永い永い孤独の果てにJACKは気づいた。

そして錆すら浮かない精緻で頑強な体躯を丸め、泣いた。

泣き方も学んでいた。誰かの死を悼む事も。孤独の恐怖など言わずもがなだ。

そんなJACKの出した答え。

「死ねないカラダに命など宿るはずも無い」

JACKは決断した。

鉄<sup>くろがね</sup>のカラダが人のものであると認める為に。数字のココロが人のものであると認める為に。

それらを備えた自分のイノチが命であると認める為に。

他でもない自分で、自分を認める為に。

JACKは自らの命を摘み取った。

死に恐怖を覚える心が震わせる、鉄くろがねの左手で。

死を以って命を為した男の顔は恐怖と苦悶が刻まれていた。

命の刻印が為されたその体は、千歳、錆こそ浮かせながらも、終ぞ大地に還る事は無かった。

## ジャック・オー・ランタン（後書き）

ジャック・オー・ランタンは、悪魔に貰った石炭ををカボチャに入れランタンとし、それを持ってさまよう男の寓話、らしいです。

なんか、勝手に造られた命が人生の道をさまよい続けるというエピソードにリンクしたので、少しモチーフとして拝借。

## かいじゅうの爪

卵を割って生まれてきたのは、小さなかいじゅうでした。

周りを見渡せば怪獣がいっぱい居ます。

鋭い牙や、尖った角。大きな翼に長いしっぽ。色んな怪獣がいました。

中には火を吐くものや、大地を揺らす物まで、それはもう色々です。

皆、自慢の牙や角で戦い合います。血が出て、涙が流れて。

小さなかいじゅうは立派な爪を持っていたのですが、戦いはしませんでした。

傷つけるのも、傷つけられるのも怖くてしょうがないからです。

大きい爪の小さなかいじゅうは、心の優しいかいじゅうなのです。

「なんで、傷つけあうんだろう」

「なんで、自分の強さを自慢するのだろう」

小さなかいじゅうは戦いが嫌いで、森の奥のほうに住んでいました。

たわわに実った林檎を食べて。葉と葉の間の小さな空に浮かぶ雲とおしゃべりをして。

小さなかいじゅうを「弱虫」といじめる怪獣も居ました。

でも、小さなかいじゅうは決して爪を振るいません。お空に向かって泣いてしまっただけです。

やがて小さなかいじゅうは、大きなかいじゅうになりました。

大きな体で、狭い森には住めません。かいじゅうは怖がりながら、仕方なく森を出ました。

外の世界。皆が皆で傷つけ合っていて、怖い、外の世界。

でも、そんな世界はありませんでした。

何度も何度も戦ったからでしょうか。自慢の牙は欠け、角は折れてなくなり。翼は折れて、傷つけあった体は丸くなり。

そこに怪獣達は居ませんでした。誰かを傷つける武器を失くしたヒトがそこにはたくさん居ました。

かいじゅうは困ってしまいました。外の世界のことなんか全然わからなかったのです。

みんなと違う自分に戸惑っていたかいじゅうの事を、一人が見つめました。

忘れもしません。そいつは「弱虫」と、かいじゅうをいじめていた奴でした。

かいじゅうを傷つけたトゲもすでに磨耗したそいつは、かいじゅう

の大きな爪を見て、大きな声を上げます。

「皆！ こいつ大きな爪を持つてるぞ！ 怪獣だ！」

その声に、皆が怪獣を見、爪に目をやると一様に悲鳴を上げます。

「怪獣だ！ 怪獣だ！」

怪獣は慌てて爪を隠し、言いました。「僕は誰かを傷つけたりなんかしないよ」と。

でも、皆の恐怖は止みません。

「怪獣だ！ 大きな爪を持つてる怪獣だ！ 狂暴に違いない！」

見る、あの醜い顔を！」

怪獣は今度は慌てて顔を隠し、言いました。「ごめんよ。皆の目に触れないようにするから」と。

それでも、皆の恐怖は収まりませんでした。

怪獣はもう、どうしていいかわからずに困ってしまいました。

仕方がない。森へ帰ろう。狭くて寂しいけど外には居られないから。怪獣がそう思った時でした。

誰かが悲鳴交じりの言葉を発しました。

「あんな、何考えてるか分からない奴、逃がしちゃだめだ！ 今やっつけよう」

怪獣はその言葉に目の前が真っ暗になったようになってしまいました。

「僕は何もしていないのに」

「ただ、自分が傷つきたくなくて」

「ただ、誰かを傷つけたくなくて」

人々は、皆手に手に武器を持ち、怪獣をやっつけようと戦いました。怪獣をやっつけなければ、私達が食べられてしまう。皆、心の底からそう思って戦いました。

結局、怪獣は、かいじゅうは、その大きく強い爪を使うことはありませんでした。

「僕は何もしていないのに」

「僕は何もするつもりもないのに」

そう心の中で叫びながら、かいじゅうはやられてしまいました。

一人ぼっちの優しいかいじゅうは、やられてしまいました。

## かいじゅうの爪（後書き）

なんとなく正しさをぼやかしてみた寓話。

最近気になったトピックの自分なりの解釈をベースにくみ上げてみたり。

## 朝冷えの街

鋭く尖った凍てつく針が、痛いほどに突き刺さる。  
夜を越えた風が、身を切って、陽を知らぬ空気が張り詰める。

凍りついた寒さで、輪郭を知る。

血が流れ、筋がうなりを上げて、熱を生む。

冷たい外と、熱い内側。

それが世界を隔てる境界線。

白くけぶる存在証明。

大きくそれを吐き出して、ペダルに力を込める。

後ろへたなびくそれが、未来への羅針盤。

払暁の暗がりの中で、凍える体が、どこを向いているかは分からないけれど、前へ進んでいるのは確かだから。

夜を振り払うように車輪は回る。

進んでも、進んでも、暗闇は後ろから肩を掴むように。

膝を抱えて俯いてても、陽は昇るはずだけど、がむしゃらにでも進まなければ、暗がりにはポツカリ開いた大穴に呑み込まれて行きそうだから。

落ち葉の絨毯をガサガサと蹴立てて、車輪を回す。

耳に障るその音だけが、世界が息を止めていない証拠のように。

白い吐息と、擦れる落ち葉。

それぞれが、内と外との存在証明。

色と音が重なって、朝の光へ僕を押しだす。

空気の中に分け入って、車輪を回して進むから、一瞬一瞬、居場所  
が違つて。

後ろを振り向きながら、過去の自分に別れを告げて。

冬の朝を車輪が回る。

夜と過去とを置き去りにして。

今、この瞬間すらも過去にして。

夜を終えた街に火が灯る。

夜と過去とを置き去りにして。

朝が運ぶ、未来を信じて。

## 涙と笑顔の壁

その建物はいくつかの部屋に分かれていました。

ただ、扉も窓もないので、部屋の中に居る人は互いを知りません。どうやら、自分が居る部屋以外にも部屋があるかもしれない、誰か居るかもしれない。でもわかりません。

ウサギはそのいくつもの部屋の中の一つに居ました。

その部屋は真っ暗でした。

光がないから、色も形もありません。光がないから、熱もありません。寒々しくて、寒くて。風もないからどんよりと空気は淀んでいて、嫌な臭いが立ち込めています。

ウサギは泣いていました。

なぜか。

ウサギは悲しいからです。

なぜか。

暗いからです。寒いからです。気持ち悪いからです。

ウサギの居る部屋は悲しみを閉じ込めたところでした。そこに居るからウサギは悲しみしか知りません。泣いてばかりいます。

自分の流した涙で溺れながら、それでもウサギは泣く事しか知りません。

ある日、ウサギが泣き止んでいる時。泣きつかれた、涙と涙の合間。

声が聞こえました。

ウサギは初めて聞く、自分の泣き声以外の声に驚き、壁に耳を当ててみます。

もしかしたら、本当に別の部屋があるのだろうか。もしかしたら、本当に別の誰かが居るのだろうか。

そうやって壁の向こうに聞いた音は、笑い声でした。

ウサギはまた泣いてしまいました。自分は泣いた事しかないのに、壁の向こうの奴は笑っている。

悔しくて、憎くて、悲しくて、ウサギは泣いてしまいます。

ウサギはひとしきり泣いた後、壁を壊す事を決めました。

壁は固く、前歯が削れました。前脚の爪も割れ、欠け、真っ暗でわからなかったけど、それらは真っ赤に染まっていました。

壁を壊すのに疲れては泣いて、泣くのに疲れては壁を壊しました。

どれほどの時が経ったでしょう。ようやく固い壁が壊れました。

ウサギが作った小さな小さな穴から光が漏れたのです。その光を励みに、壁を壊し続け、とうとうウサギは、隣の部屋へたどり着きました。

そこは暖かな光と、心地よい音楽と、気持ちの良い香りと。そこは嬉しさと楽しさが詰まっていました。

そこには白いウサギが居て、けらけらけらと笑っていました。

灯りに照らされて、その白いウサギを見て、ウサギは初めて自分の体が真っ暗な事を知りました。

泣いた事しかない黒いウサギは、笑ったことしかない白いウサギをたおしました。

白いウサギは、黒いウサギにたおされるときもけらけらけらと笑っていました。

こうして黒いウサギは、暗く寒く気持ち悪い部屋から出ました。

たどり着いたのは素晴らしいところでした。

それでも、黒いウサギは嬉しい気持ちになりませんでした。光も音も香りも、心地よいはずの部屋で、黒いウサギは幸せになれませんでした。

黒いウサギは気づきました。自分は幸せになる方法を知らないのだと。

折角幸せな場所に居るのに、自分は幸せを感じる事ができないの

だと。

暖かい部屋で、真っ白な部屋で、黒いウサギは泣きました。

黒いウサギは泣く事しか知らないからです。

## IN MY ROOM

一日一回真つ暗になる以外、ずっと明るい部屋の中。

笑ってる時も、泣いてる時も。怒っている時も、嬉しい時も、ずっと光に照らされている。

明るい光以外なんにも無い部屋で、唯一あるのは窓一つ。

窓の外は、轟々と唸りをあげている時もあれば、真っ白で何も見えない時もある。

部屋の中に何時でも独り座っていた。

外の景色は見たことないものばかりで。

部屋の中でいつからか二人で座っていた。

外の景色はわからないものばかりで。

彼は、僕と仲が悪くて、彼女はあいつと仲が悪かった。

目を合わせず、口を開くと喧嘩が始まる。

ある日の窓の外の景色。その日は、虹がかかった空に、桜と雪が舞っていて、奇跡の様な美しさで、さすがに凄いと、僕らは声を揃えて、足並み揃えて。歌を歌って、踊りを踊って。それでもそんな日ですらブチブチ言ってる奴も一人くらいはいたりして。

皆で一つになれないままに喧々諤々日々喧嘩。

殴り合って、無視しあって、いつしか一人一人と減っていった。

窓を流れる風景はもう、目にも泊まらないくらいの速度になって。

いつしか、明るい部屋で一人、僕らは膝を抱えて座っていた。

静かになったその部屋で、すこし寂しいその部屋で、光は僕を照らしている。

見える景色も、聞こえる自分の声も、全部不思議に歪んでいて。いつから歪んだのかもわからなくて。何もわからないまま、考えてたら何がわからないのかもわからなくなってきた。

見たことない自分の手を見つめながら、見たことある手が恋しくて。

窓はすっかり曇ってしまい。ゆっくり暗くなっていくその部屋で、僕は知らない声で泣いてみた。

## 毒に咲く花

真っ黒な土の上に、黄色い花。厚い雲に隠れた太陽の代わりに、周りを照らすように。

その花を見る人は皆。その花があまりに綺麗だから。あまりに健気だから。あまりに素晴らしいから。夢見心地で花を見る。

そんな、夢見心地のまま、このままどこか遠く連れていってくれないかと、こぼれるほどに。

黄色い花は美しい。その花が美しいのは、まんまると、燦燦と、咲き誇っているから。

でも、本当に、黄色いその花が美しいのは、周りの土が真っ黒に汚れているから。

花を美しいと思う人の心も、汚れているから。

なにもかも汚れている中で、美しいから、その花は、素晴らしい。

土も、そんな土に立つ人も、草も木も、みんな真っ黒いのは、真っ黒い風が吹いて、真っ黒い雨が降るから。

大きな木陰に居ても、大きな岩の下にいても、真っ黒い雨風が、毒を撒き散らす。

毒はすぐに白くなるけど、少しずつ少しずつ溜まっていく。

黒は溜まって、大きくなって。溢れて。それで、周りを黒く染める。

溢れて流れ出れば、黒くなくなるけれど、それでも、周りを黒く染めるから、いつか、また黒くなる。

溜まって溢れて染められて。黒が白に染まるより早く、白が黒に染まってゆく。

白くにも染まる。黒くにも染まる。

それでも、みんな黒く染まっていく中で。

まんまるに黄色く美しく花。

強く、黒い風に、根を千切られそうになっても。

激しく、黒い雨に、茎を折られそうになっても。

健気に気高く、咲き誇る。まるで、黒い毒を、糧にでもしてるかの如く、生き活きと。

花は黒に黄色く咲く。

周りの全てが黒に染まっても。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0514o/>

---

ポエる、ポエれば、ポエらいでか

2011年11月18日00時26分発行